

知の創造基盤としての図書館

— ミシガン大学大学院図書館 —

横田カーター啓子

ミシガン大学大学院図書館は約1300万冊の資料を所蔵する。2007年に電子資料の利用が紙媒体資料の利用を上回り、2015年度には電子資料利用は紙資料の10倍となった¹⁾。人文社会科学でも、テキスト、地図、図面等含む画像、動画、音源、統計等のデータ資料を利用するデジタル研究支援を行う図書館の役割はますます重要になっている。

ここ数年に高等教育機関で顕著になったことは、研究と教育の多様化とグローバル化、学際的、国際的な共同研究の奨励、既に膨大なデータ研究を行う科学・技術・工学・医学に追従して、人文社会科学でも電子資料が増大しビッグデータ研究が活発化してきたことである。それに伴い研究助成機関方針と学術誌への出版条件も変化し、研究の透明化が重視され、研究成果とそれを検証できるデータの保存と公開を半永続的に可能にする信頼に足る技術的基盤の保証が必須条件になってきた²⁾。こういった研究環境の変化に伴い同館では図書館組織を大きく研究・コレクション・学習支援に再編成し直し、研究部門ではデータ管理サービス専門官が新規採用され、まず現状把握のため人文社会科学分野の研究者に研究・出版と助成金申請のためのデータに関する必要条件をインタビュー調査した。その分析を踏まえて、利用者サービスと情報基盤充実が拡充されている。

利用者サービスでは、研究・学習支援のためGIS, Visualization, Text

encoding, Data mining, Research designer 等、テクニカルスペシャリスト7名が雇われ、多くの研修と個別指導を提供している。従来、各分野の研究者と連絡を取り合い、選書購入やリファレンスに応じてきた研究司書もデジタル研究の研修を受け、利用者に適切なデジタルツールやテクニカルスペシャリストへの橋渡しをしている。

情報基盤充実でも図書館が中心的役割を果たす。多様な形態のデータに対応するリポジトリDeep Blue Dataを開始。これは、研究者自身が公開共有を前提として登録するデータの半永続保存とオープンアクセスを保証し、助成金と出版の基盤になる。また、研究者による自由な発信も可能にし、新たな知の創造に寄与する研究環境を提供する。この機能なくしてこれからの研究発展はあり得ないだろう。

ここで学生のリサーチサイクルを見てみよう。例えば、学部生用のUndergraduate Research Opportunity Programというグループ研究では、学生たちは基礎論文を読み、議論を立て、一次資料、フィールドワークでのデータ収集、データ分析をして結論を導きだし発表をする。この過程で司書やテクニカルスペシャリストに資料、デジタルツール、効果的な結果のまとめ方や発表の方法等を相談する。研究成果、テキストと派生したデータは、Deep Blue Dataで保存し提供する。学生は研究者IDを

研究者データベースORCID³⁾に登録。このデータベースにはDeep Blue Dataに保存されるフルテキスト成果をリンクし発信、共有することもできる。

ところで、デジタル研究が増加しようと司書の仕事が研究基盤支援であることは変わらない。ミシガン大学の司書はProQuest等の電子資料業者と会合を持ち、研究者のニーズを活かしデジタル研究を可能にするデータベース仕様の開発に協力している。ところで、日本の画像電子資料はテキスト分析もできず、保存機能はあるが研究商品的価値は乏しい。日本語資料による研究と学術出版業が今後存続していくためには、大学のスーパーグローバル化の一貫としても、学術情報のフルテキスト化とオープンアクセスの推進、図書館情報基盤の整備、そして、研究者・司書・出版社・基盤開発者が共同して資料開発や可能なビジネスモデルを構築し、研究環境を創造し広げていく国際的的努力が強く望まれる。

注

1) <http://www.lib.umich.edu/statistical-highlights>

2) 例としては <https://ajps.org/guidelines-for-manuscripts/>

3) <http://orcid.org/>

(よこた カーター けいこ)

ミシガン大学大学院図書館日本研究司書
[NDC10 : 017.753

BSH : 1. ミシガン大学大学院図書館

2. 大学図書館-アメリカ合衆国]